

平年収量が増減する都道府県の生産事情 (詳細版)

大臣官房統計部

令和3年3月23日

農林水産省

北海道（前回変動:令和2年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は552kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、品種構成に大きな変化はみられない。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
ななつぼし	589	47.2	46.3	45.1	45.8	45.7
きらら397	610	10.1	9.5	9.4	9.5	9.4
ゆめぴりか	568	19.9	20.7	21.8	21.7	21.8
ふっくりんこ	559	6.5	6.4	6.1	6.2	6.0
そらゆき	629	0.4	0.5	0.4	0.5	0.7

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
石狩	548	6.8	6.9	7.0	7.0	7.1
南空知	555	18.3	18.1	17.9	17.9	17.7
北空知	581	25.5	25.6	25.7	25.9	26.0
上川	582	28.7	28.6	28.2	28.4	28.2
留萌	535	4.1	4.1	4.1	4.0	4.0
渡島	497	2.8	2.8	2.8	2.9	2.9
檜山	510	3.8	3.8	3.9	3.8	3.9
後志	533	4.3	4.3	4.5	4.5	4.5
胆振	506	3.4	3.5	3.6	3.4	3.5
日高	502	1.3	1.3	1.3	1.2	1.2
オホーツク・十勝	524	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

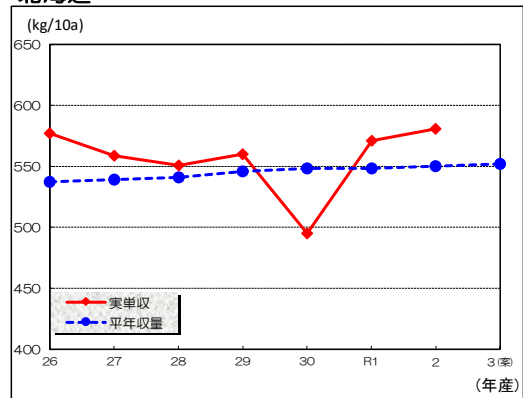
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

北海道における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が1.2ポイント減少しているものの、千もみ当たり収量が1.8ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は2.0ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準
北海道



北海道	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	577	559	551	560	495	571	581	
7中5平均	564 (14)							
平年単収	537	539	541	546	548	548	550	552
前年差	2	2	2	5	2	0	2	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

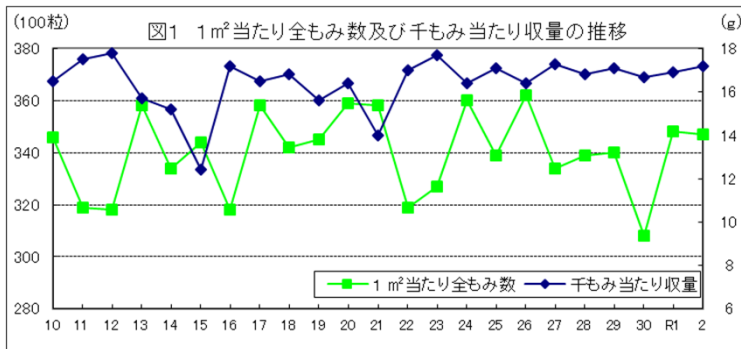
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1 m ² 当たり 株数 (株)	22.5	22.2	22.0	22.2	21.9	21.9	0.0	22.2	98.7	△ 1.3
1 m ² 当たり 有効穂数 (本)	559.9	563	538	500	599	538	△ 61.0	558	99.7	△ 0.3
1 穂 当たり もみ数 (粒)	61.5	60.2	63.2	61.6	58.1	64.5	6.4	60.5	98.4	△ 1.6
1 m ² 当たり 全もみ数 (百粒)	345	339	340	308	348	347	△ 1.0	341	98.8	△ 1.2
千もみ 当たり 収量 (g)	16.6	16.8	17.1	16.7	16.9	17.2	0.3	16.9	101.8	1.8
玄米 千粒重 (g)	21.7	21.6	22.1	21.6	21.2	21.9	0.7	21.8	100.5	0.5
10 a 当たり 玄米重 (kg)	568	568	580	513	588	598	10.0	580	102.0	2.0
前 40 日 平均 気温 (°C)	0.6	0.3	1.5	0.7	0.7	0.5	△ 0.1	0.8		0.2
後 40 日 平均 気温 (°C)	0.9	1.7	△ 0.9	△ 0.8	0.5	1.6	1.1	0.4		△ 0.5

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1 m² 当たり全もみ数及び千もみ 当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指)数
26	○	—	107
27	×	◎	104
28	—	○	102
29	—	○	103
30	※	—	90
R1	○	—	104
2	○	○	106

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

収量・品質の安定に向け、健苗の育成や稲体の耐冷素質の向上を図るため、以下の指導が行われている。

- ・ 育苗管理の徹底
- ・ 深水管理とそれを可能とする畦畔整備
- ・ 地力増進やほ場の透水性改善
- ・ 防風対策等の栽培環境整備
- ・ 適正施肥

また、成苗移植の普及など安定生産に向けた栽培技術が定着している。

青森（前回変動:令和2年）

1 スムージングスラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は602kg（対前年差+5kg）となった。これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「まっしぐら」が増加傾向にあり、令和3年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
つがるロマン	592	29.5	27.6	26.6	25.2	17.3
まっしぐら	620	63.4	64.1	64.9	67.5	75.5
青天の霹靂	539	3.7	4.4	4.6	3.5	3.7

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
青森	594	11.2	11.3	11.5	11.6	11.5
津軽	634	62.2	61.8	61.5	61.2	60.8
南部・下北	572	26.6	26.9	27.0	27.3	27.7

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

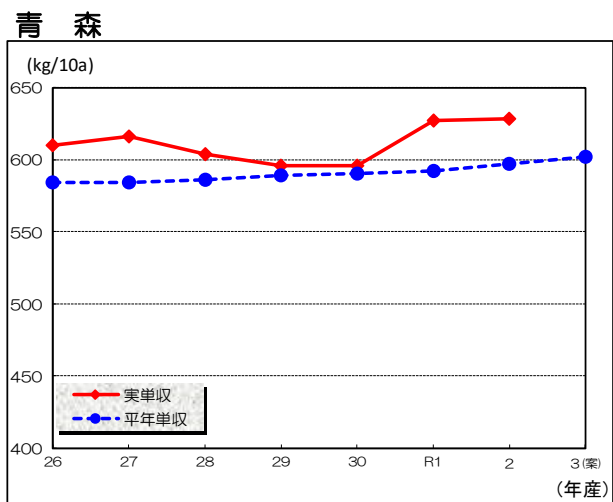
直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

青森県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量がほぼ同水準、1㎡当たり全もみ数が2.0ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.9ポイント増加している。（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



青森	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	610	616	604	596	596	627	628	
7中5平均	611 (14)							
平年単収	584	584	586	589	590	592	597	602
前年差	0	0	2	3	1	2	5	5

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

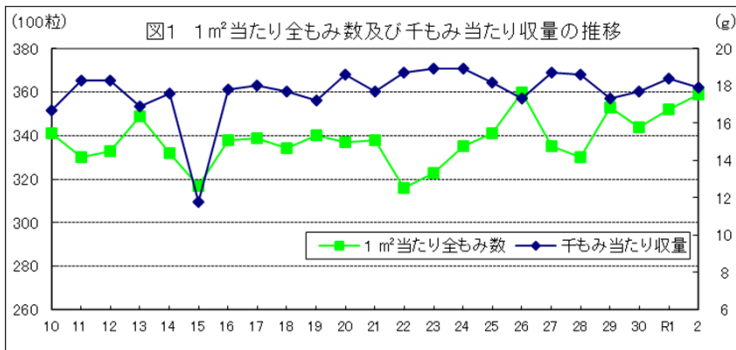
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	20.9	19.5	19.5	19.4	19.6	19.6	0.0	19.7	94.3	△ 5.7
1㎡当たり有効穂数(本)	416.2	427	421	405	455	442	△ 13.0	431	103.6	3.6
1穂当たりもみ数(粒)	80.3	77.3	83.8	84.9	77.4	81.2	3.8	80.1	99.8	△ 0.2
1㎡当たり全もみ数(百粒)	334	330	353	344	352	359	7.0	341	102.0	2.0
千もみ当たり収量(g)	18.4	18.6	17.3	17.7	18.4	17.9	△ 0.5	18.3	99.5	△ 0.5
玄米千粒重(g)	22.1	22.0	22.6	22.0	22.2	21.6	△ 0.6	22.2	100.5	0.5
10a当たり玄米重(kg)	609	615	610	609	646	642	△ 4.0	620	101.9	1.9
前40日平均気温(°C)	0.5	0.1	1.7	1.5	0.8	△ 0.0	△ 0.8	0.9		0.4
後40日平均気温(°C)	0.9	0.9	△ 1.6	△ 0.6	1.0	2.0	1.0	0.4		△ 0.5

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作況最終指数)
26	◎	×	104
27	—	○	105
28	—	○	104
29	◎	×	101
30	○	×	101
R1	○	○	106
2	◎	—	105

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産(気象に左右されない米づくり)に向け、以下の指導が行われている。

- 適正な肥培管理(つがるロマンは多肥料栽培に弱いことから追肥は窒素成分で2kg以内にする等)、水管理、適期移植、土作りの推進等(安定栽培技術の普及・定着)。
- 育苗箱全量施肥では、施肥(播種)後約30日の溶出抑制期間があるため、移植直後に吸収される窒素分が寒冷地では慣行栽培に比べ少なく、初期分けつが緩慢となり穂数の減少傾向が強いことから、穂数確保のため即効性肥料も併せて施用する方法が県内で一定の広がりを見せている。

岩手（前回変動:令和2年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は540kg（対前年差+1kg）となった。これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること、追肥の適正実施等により1㎡当たり全もみ数が増加していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「銀河のしずく」が増加傾向にあり、令和2年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
ひとめぼれ	557	70.5	70.0	69.1	68.9	69.0
あきたこまち	560	15.1	14.7	14.4	14.7	14.6
いわてっこ	542	4.4	4.4	4.5	4.8	4.9
銀河のしずく	580		1.7	2.8	3.0	3.3
						+0.5/年

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
北上川上流	574	23.7	24.0	24.5	24.8	24.8
北上川下流	546	69.3	68.9	68.5	68.3	68.3
東部	498	2.7	2.7	2.5	2.5	2.5
北部	514	4.3	4.4	4.5	4.4	4.4

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

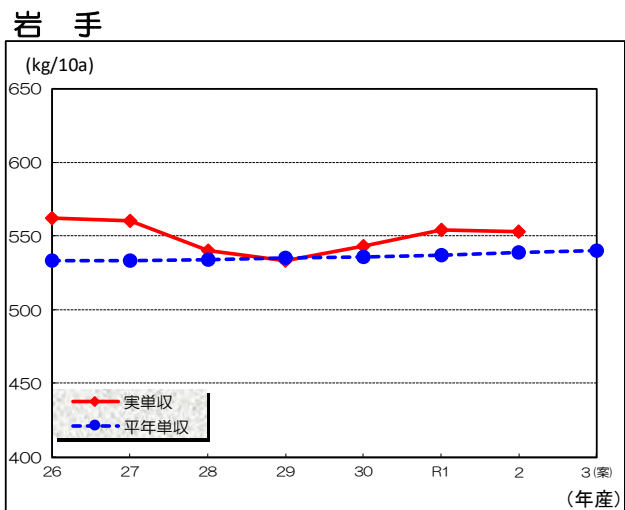
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

岩手県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数がほぼ同水準である結果、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



岩手	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	562	560	540	533	543	554	553	
	7中5平均 550 (11)							
平年単収	533	533	534	535	536	537	539	540
前年差	0	0	1	1	1	1	2	1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

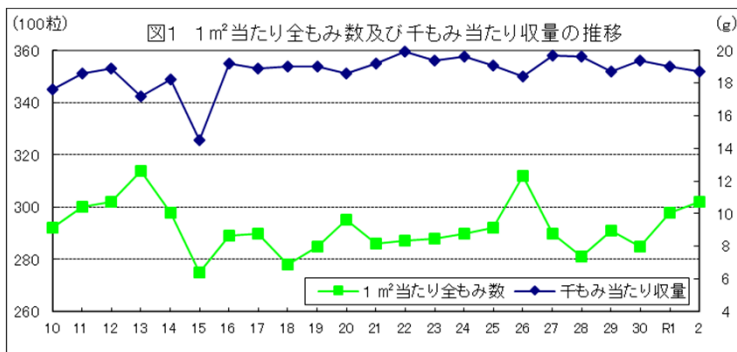
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	18.6	17.6	17.5	17.3	17.4	17.4	0.0	17.8	95.7	△4.3
1㎡当たり有効穂数(本)	431.2	426	440	412	457	450	△7.0	442	102.4	2.4
1穂当たりもみ数(粒)	67.2	66.0	66.1	69.2	65.2	67.1	1.9	66.6	99.1	△0.9
1㎡当たり全もみ数(百粒)	288	281	291	285	298	302	4.0	290	100.7	0.7
千もみ当たり収量(g)	19.3	19.6	18.7	19.4	19.0	18.7	△0.3	19.3	100.0	0.0
玄米千粒重(g)	21.7	21.8	21.9	21.9	21.5	21.2	△0.3	21.8	100.5	0.5
10a当たり玄米重(kg)	558	550	543	552	565	565	0.0	561	100.7	0.7
前40日平均気温(°C)	0.9	0.4	1.7	2.6	0.8	△0.1	△0.8	1.2		0.3
後40日平均気温(°C)	1.1	1.3	△1.2	△0.3	1.5	2.4	0.9	0.6		△0.5

資料:作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注:1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注:2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料:『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
26	◎	×	105
27	—	○	105
28	×	○	102
29	○	×	98
30	—	—	101
R1	○	—	103
2	○	×	103

注:◎:良(多い)、○:やや良(やや多い)、
—:平年並み、×:やや不良(やや少ない)、
※:不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- 品種特性を踏まえた品種の作付、低温障害回避のため適期移植の指導。
- 有機物による土作り、追肥の適正実施の指導(土壌診断に基づく補給型施肥(収穫等によってほ場外に持ち出される分だけを補給)及び追肥時期・追肥量の適正な実施(ひとめぼれ、あきたこまち、いわてっこ、銀河のしずくは幼穂形成期に2kg/10aを上限、どんぴしゃりは幼穂形成期に2kg/10aを基本)等を推進)。

宮 城（前回変動:令和2年）

1 スムージングスラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は541kg（対前年差+1kg）となった。これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
ひとめぼれ	558	75.7	75.5	74.9	73.7	72.6
ササニシキ	573	6.2	6.5	6.2	5.8	5.8
まなむすめ	579	5.6	4.8	4.8	4.1	4.9
つや姫	584	5.6	6.5	6.9	7.1	7.2
萌えみのり	633	0.5	0.6	1.0	1.5	1.8
						+0.4/年

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「萌えみのり」が増加傾向にあり、令和3年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
南部	526	10.5	10.3	10.1	10.0	9.9
中部	537	18.4	18.3	18.6	18.7	18.6
北部	559	59.1	59.3	59.3	59.3	59.4
東部	554	12.0	12.0	12.0	12.0	12.1

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

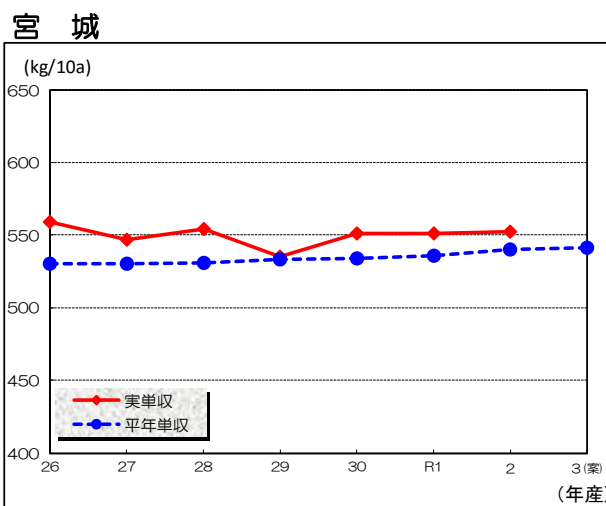
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

宮城県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.6ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が3.8ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は2.0ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



宮 城	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	559	547	554	535	551	551	552	
	7中5平均 551 (11)							
平年単収	530	530	531	533	534	536	540	541
前年差	0	0	1	2	1	2	4	1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

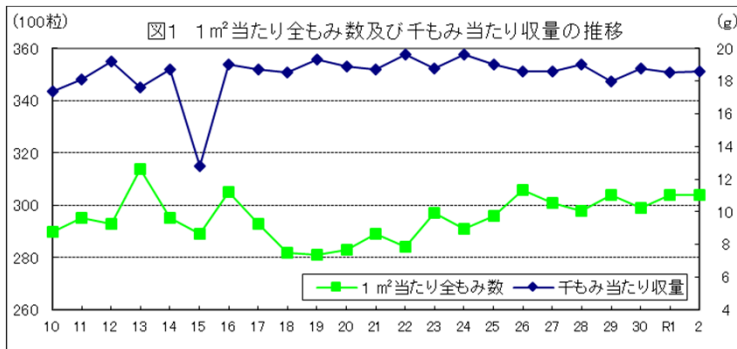
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	18.0	17.2	17.1	16.9	16.8	17.2	0.4	17.4	96.7	△ 3.3
1㎡当たり有効穂数(本)	437.5	439	460	443	464	448	△ 16.0	448	102.3	2.3
1穂当たりもみ数(粒)	66.3	67.9	66.1	67.5	65.5	67.9	2.4	67.2	101.4	1.4
1㎡当たり全もみ数(百粒)	289	298	304	299	304	304	0.0	300	103.8	3.8
千もみ当たり収量(g)	19.0	19.0	18.0	18.8	18.5	18.6	0.1	18.7	98.4	△ 1.6
玄米千粒重(g)	21.6	21.5	21.8	21.6	21.2	20.9	△ 0.3	21.6	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	552	566	546	562	563	564	1.0	563	102.0	2.0
前40日平均気温(°C)	0.9	0.6	2.2	3.1	0.2	△ 0.4	△ 0.6	1.2		0.3
後40日平均気温(°C)	1.0	1.3	△ 1.3	0.4	1.7	2.5	0.8	0.8		△ 0.2

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況最終指数)
26	◎	×	105
27	○	×	103
28	○	—	105
29	○	×	99
30	○	—	101
R1	○	—	102
2	○	—	102

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 高温登熟による品質低下への対策として晩期栽培(遅植え)の推進。
- ・ 適正な水管理、土づくりの励行、適正な栽植密度・肥培管理等。
- ・ 大規模化に対応した熟期の異なる品種構成の導入等の推進。

秋 田（前回変動:令和2年）

1 スムージングスラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は577kg（対前年差+2kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、大きな変化はみられない。

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
あきたこまち	582	71.9	72.5	73.6	74.5	74.2
ひとめぼれ	580	8.1	7.9	7.7	7.7	8.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
県北	572	21.0	20.8	21.4	21.5	21.5
県中央	593	36.7	36.7	36.3	36.1	35.9
県南	596	42.3	42.5	42.3	42.4	42.6

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

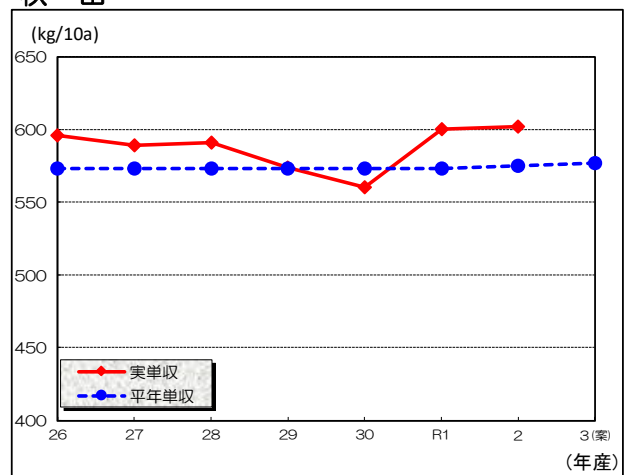
作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

秋田県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数がほぼ同水準、千もみ当たり収量が2.2ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.8ポイント増加している。（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準
秋 田



秋 田	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	596	589	591	574	560	600	602	
7中5平均	590 (15)							
平年単収	573	573	573	573	573	573	575	577
前年差	0	0	0	0	0	0	2	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は前年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

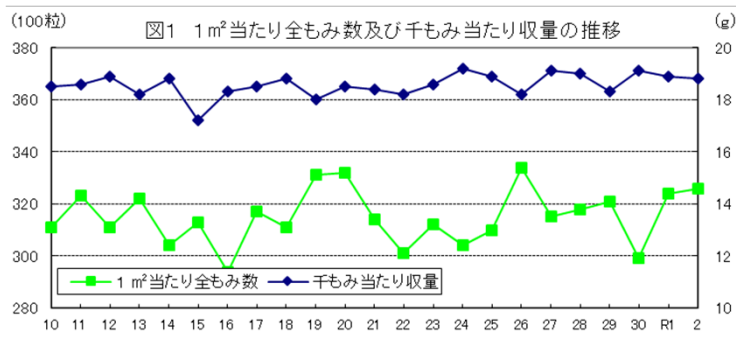
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	19.3	19.1	19.0	18.8	18.9	18.8	△0.1	19.1	99.0	△1.0
1㎡当たり有効穂数(本)	432.5	428	427	403	451	445	△6.0	437	101.1	1.1
1穂当たりもみ数(粒)	72.9	74.3	75.2	74.2	71.8	73.3	1.5	73.3	100.5	0.5
1㎡当たり全もみ数(百粒)	314	318	321	299	324	326	2.0	316	100.8	0.8
千もみ当たり収量(g)	18.5	19.0	18.3	19.1	18.9	18.8	△0.1	18.9	102.2	2.2
玄米千粒重(g)	21.5	21.8	22.3	21.8	21.5	21.4	△0.1	21.8	101.4	1.4
10a当たり玄米重(kg)	585	603	589	571	612	614	2.0	596	101.8	1.8
前40日平均気温(°C)	0.8	0.2	1.1	2.0	0.8	△0.0	△0.8	0.7		△0.1
後40日平均気温(°C)	0.7	1.3	△0.9	△0.4	1.7	2.3	0.6	0.4		△0.3

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
26	○	×	104
27	—	○	103
28	—	○	104
29	○	×	99
30	×	○	96
R1	○	—	104
2	○	—	105

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 土づくりの推進、適期移植と栽植密度の適正化。
- ・ 適正な水管理、雑草防除の徹底。
- ・ 適正な施肥管理と適期刈取り等。

福島（前回変動:令和2年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は551kg（対前年差+1kg）となった。これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、近年の収量水準が平年収量を上回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「天のつぶ」等が増加傾向にあり、令和3年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
コシヒカリ	562	59.6	59.4	57.7	55.5	53.5
ひとめぼれ	588	22.2	21.4	20.4	20.3	19.3
天のつぶ	612	7.7	8.7	12.6	14.7	16.8
						+2.1/年

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
中通り	539	55.8	55.5	55.0	54.5	54.0
浜通り	521	9.4	9.9	10.6	11.4	11.6
会津	601	34.8	34.6	34.4	34.1	34.4

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。

2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

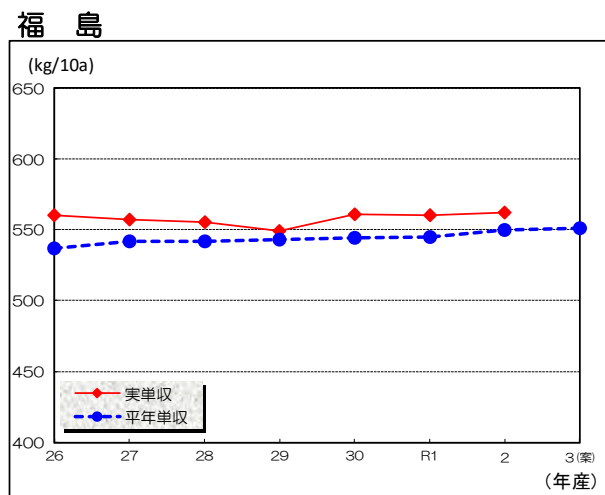
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

福島県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.6ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が3.6ポイント増加している結果、10a当たり玄米重は1.7ポイント増加している。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



福島	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	560	557	555	549	561	560	562	
7中5平均	559 (9)							
平年単収	537	542	542	543	544	545	550	551
前年差	0	5	0	1	1	1	5	1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

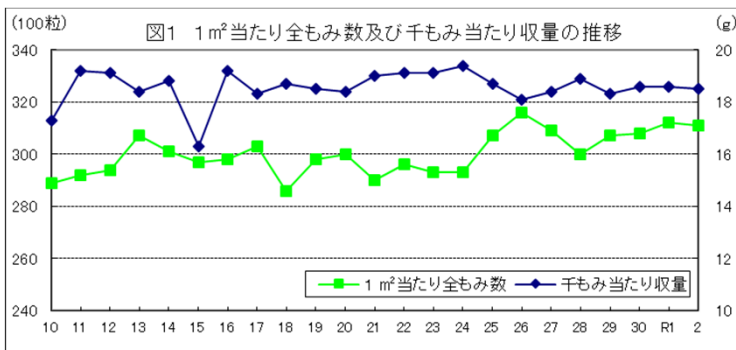
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1 m ² 当たり株数 (株)	17.9	17.2	17.1	17.3	16.8	16.8	0.0	17.3	96.6	△ 3.4
1 m ² 当たり有効穂数 (本)	389.5	395	405	396	414	404	△ 10.0	403	103.4	3.4
1 穂当たりもみ数 (粒)	76.0	75.9	75.8	77.8	75.4	77.0	1.6	76.1	100.1	0.1
1 m ² 当たり全もみ数 (百粒)	296	300	307	308	312	311	△ 1.0	306	103.6	3.6
千もみ当たり収量 (g)	18.9	18.9	18.3	18.6	18.6	18.5	△ 0.1	18.6	98.4	△ 1.6
玄米千粒重 (g)	21.9	21.7	21.9	21.7	21.8	21.4	△ 0.4	21.8	99.5	△ 0.5
10 a 当たり玄米重 (kg)	559	567	561	572	579	575	△ 4.0	569	101.7	1.7
前40日平均気温 (°C)	0.7	0.5	1.5	3.2	0.6	△ 0.3	△ 0.8	1.0		0.3
後40日平均気温 (°C)	1.0	1.0	△ 1.0	0.3	1.3	2.8	1.5	0.5		△ 0.5

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1 m² 当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄 (平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指数)
26	◎	×	104
27	○	×	101
28	—	○	102
29	○	×	100
30	○	—	101
R1	○	—	102
2	○	—	102

注: ◎: 良 (多い)、○: やや良 (やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良 (やや少ない)、
※: 不良 (少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 品種の市場性、冷害危険度等を総合的に考慮した適地適作の推進。
- ・ 土壌診断に基づくカリ施用、堆肥の施用による土づくり、緩効性肥料使用時の適切な追肥等の指導。

茨 城（前回変動:平成27年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は525kg（対前年差+1kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「あさひの夢」及び「ふくまる」が増加傾向にあり、令和3年産も同様の傾向になるものと考えられる。

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
コシヒカリ	526	77.5	76.9	76.2	74.1	71.9
あきたこまち	556	10.9	10.9	11.3	11.5	11.5
あさひの夢	650	0.3	0.9	1.2	1.6	2.2
ふくまる	593	0.9	1.0	1.1	1.3	1.4
						+2.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
高収量地帯	539	15.8	15.9	16.0	16.1	16.3
中収量地帯	522	73.8	73.8	73.8	73.7	72.3
低収量地帯	507	10.4	10.3	10.2	10.2	11.4

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

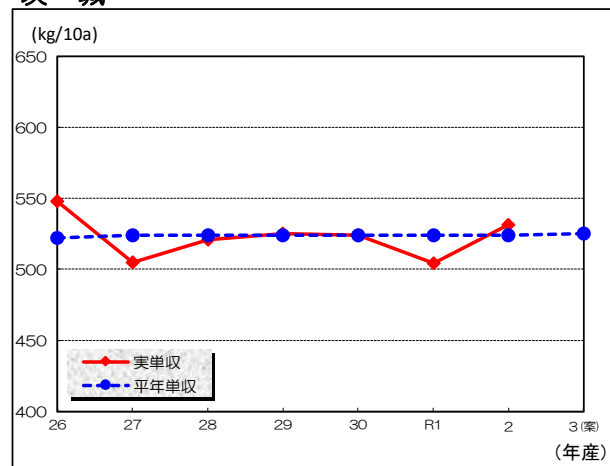
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

茨城県における近年の10a当たり収量については、概ね平年並で推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.7ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.5ポイント増加している結果、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準
茨 城



茨 城	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	548	505	521	525	524	504	531	
7中5平均	521 (-3)							
平年単収	522	524	524	524	524	524	524	525
前年差	0	2	0	0	0	0	0	1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

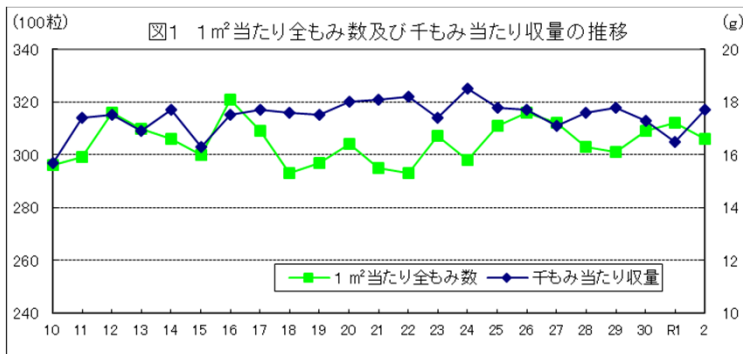
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	16.8	16.3	16.1	15.8	15.6	15.7	0.1	16.3	97.0	△3.0
1㎡当たり有効穂数(本)	378.7	367	391	390	389	378	△11.0	385	101.7	1.7
1穂当たりもみ数(粒)	79.8	82.6	77.0	79.2	80.2	81.0	0.8	81.0	101.5	1.5
1㎡当たり全もみ数(百粒)	300	303	301	309	312	306	△6.0	308	102.5	2.5
千もみ当たり収量(g)	17.9	17.6	17.8	17.3	16.5	17.7	1.2	17.6	98.3	△1.7
玄米千粒重(g)	20.9	20.8	21.6	20.6	19.7	20.3	0.6	20.8	99.5	△0.5
10a当たり玄米重(kg)	538	533	536	536	515	543	28.0	541	100.5	0.5
前40日平均気温(°C)	0.9	0.7	2.1	3.0	△0.1	△0.4	△0.3	0.9		0.0
後40日平均気温(°C)	0.9	1.0	△0.7	1.0	1.9	2.6	0.7	0.8		△0.1

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況最終指数)
26	◎	—	105
27	○	×	96
28	—	—	99
29	—	—	99
30	○	×	99
R1	○	※	96
2	—	○	103

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質米の安定生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 適期移植
- ・ 適期・適切な中干しによる茎数管理
- ・ 適期収穫と適正乾燥・調製

新潟（前回変動:令和元年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は546kg（対前年差+2kg）となった。これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「ゆきん子舞」、「つきあかり」及び「みずほの輝き」が増加傾向にあり、令和3年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
コシヒカリ	541	68.9	67.5	66.0	65.6	64.5
こしいぶき	594	16.8	16.7	17.2	17.2	16.8
新之助	560	0.0	1.0	1.9	2.4	2.7
ゆきん子舞	646	3.1	3.0	3.5	3.9	4.4
つきあかり	684	0.0	0.2	0.6	2.0	2.2
みずほの輝き	637	0.5	0.7	1.0	0.8	1.0
						+1.2/年

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
岩船	545	5.3	5.4	5.4	5.4	5.4
下越北	545	14.3	14.4	14.4	14.4	14.4
下越南	569	29.0	29.1	28.9	28.9	29.0
中越	536	21.4	21.2	21.1	20.9	20.9
魚沼	526	12.9	12.9	12.9	13.0	12.9
上越	524	12.1	12.1	12.5	12.6	12.7
佐渡	518	5.0	4.9	4.8	4.8	4.7

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

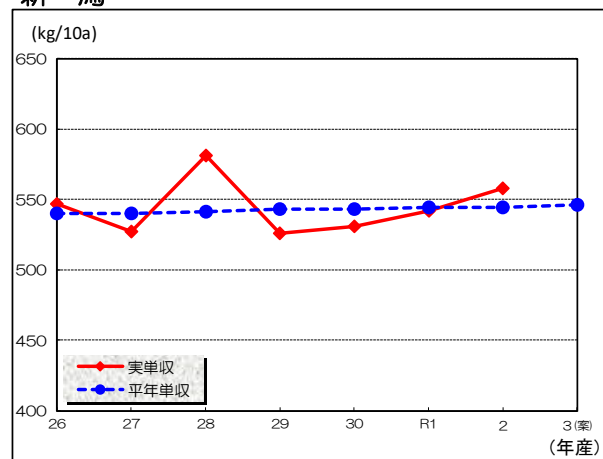
新潟県における近年の10a当たり収量については、概ね平年並で推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.6ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が2.0ポイント増加している結果、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準

新潟



新潟	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	547	527	581	526	531	542	558	
7中5平均	541 (-3)							
平年単収	540	540	541	543	543	544	544	546
前年差	1	0	1	2	0	1	0	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

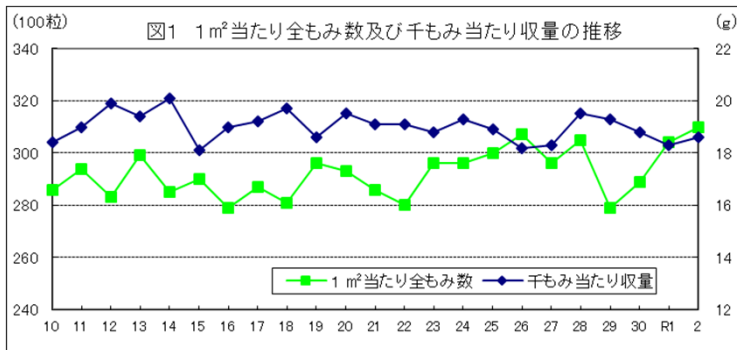
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	16.9	16.8	16.7	16.9	17.0	16.8	△0.2	16.8	99.4	△0.6
1㎡当たり有効穂数(本)	363.1	389	374	358	391	372	△19.0	380	104.7	4.7
1穂当たりもみ数(粒)	80.4	78.4	74.6	80.7	77.7	83.3	5.6	78.7	97.9	△2.1
1㎡当たり全もみ数(百粒)	292	305	279	289	304	310	6.0	298	102.0	2.0
千もみ当たり収量(g)	19.1	19.5	19.3	18.8	18.3	18.6	0.3	18.8	98.4	△1.6
玄米千粒重(g)	21.5	21.5	22.1	21.5	21.2	21.0	△0.2	21.5	100.0	0.0
10a当たり玄米重(kg)	556	596	539	542	556	576	20.0	557	100.2	0.2
前40日平均気温(°C)	0.7	0.3	1.2	2.9	0.8	△0.4	△1.2	0.8		0.1
後40日平均気温(°C)	0.8	0.8	△0.6	0.0	1.3	2.4	1.1	0.3		△0.5

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作況最終指数)
26	○	×	101
27	—	×	97
28	○	○	108
29	×	○	96
30	×	—	95
R1	○	×	100
2	○	×	103

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高品質・良食味米生産推進のため、以下の指導が行われている。

- ・ 品質低下等のリスク分散を図るため、複数品種の導入、播種・移植時期の分散
- ・ 田植え時期に合わせた適期播種
- ・ 適期の中干し・溝切りの実施
- ・ 生育診断に基づく適期な穂肥施用

富山（前回変動:令和2年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は546kg（対前年差+2kg）となった。これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であることや、密植栽培（70株/3.3㎡）の定着による安定的な穂数確保により、1㎡当たり全もみ数が増加していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「てんこもり」が増加傾向にあり、令和3年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
コシヒカリ	545	75.3	74.3	72.1	69.1	68.7
てんたかく	589	10.0	9.7	10.4	10.4	10.3
てんこもり	609	5.6	5.7	6.4	6.6	7.2
					+0.6/年	
富富富	545				2.9	3.3

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

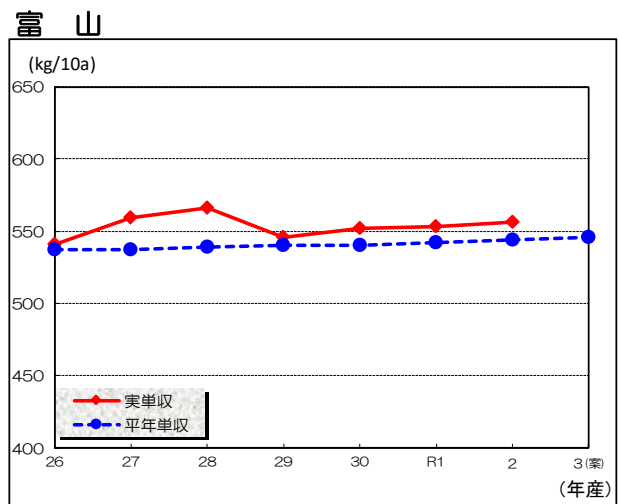
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

富山県における近年の10a当たり収量については、平年収量を上回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量が1.0ポイント減少しているものの、1㎡当たり全もみ数が1.4ポイント増加している結果、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表2、表3、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



富山	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	541	559	566	546	552	553	556	
7中5平均	553 (9)							
平年単収	537	537	539	540	540	542	544	546
前年差	0	0	2	1	0	2	2	2

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表2 収量構成要素及びアメダスデータ

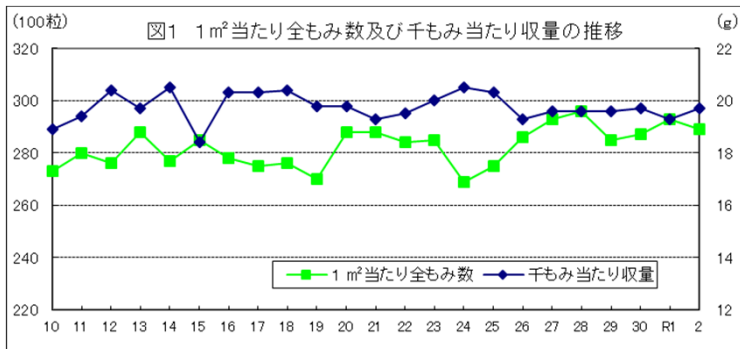
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1 m ² 当たり株数 (株)	18.7	19.2	19.1	19.2	18.9	19.7	0.8	19.0	101.6	1.6
1 m ² 当たり有効穂数 (本)	359.9	384	384	371	386	377	△ 9.0	373	103.7	3.7
1 穂 当たりもみ数 (粒)	77.6	77.1	74.2	77.4	75.9	76.7	0.8	76.8	99.0	△ 1.0
1 m ² 当たり全もみ数 (百粒)	283	296	285	287	293	289	△ 4.0	287	101.4	1.4
千もみ 当たり収量 (g)	19.9	19.6	19.6	19.7	19.3	19.7	0.4	19.7	99.0	△ 1.0
玄 米 千 粒 重 (g)	22.1	22.2	22.5	22.0	21.5	21.7	0.2	22.1	100.0	0.0
10 a 当たり玄米重 (kg)	559	579	560	565	565	568	3.0	564	100.8	0.8
前 40 日 平均 気温 (°C)	0.9	0.7	1.3	2.8	0.3	△ 0.7	△ 1.0	0.8		△ 0.1
後 40 日 平均 気温 (°C)	0.5	0.6	△ 0.4	0.7	1.3	2.3	1.0	0.3		△ 0.2

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対前年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1 m² 当たり全もみ数及び千もみ 当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄 (平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最 況終 指 数)
26	○	×	101
27	○	—	103
28	◎	—	106
29	○	—	100
30	○	—	102
R1	○	×	102
2	○	—	103

注: ◎: 良 (多い)、○: やや良 (やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良 (やや少ない)、
※: 不良 (少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

高温に打ち勝つ米づくりに向け、以下の指導が行われている。

- 高温登熟の回避として適期移植の実施。
- 高温に打ち勝つ稲体づくりとして、適正穂数に向けた栽培密度 (70株/3.3m²) の確保、適期・適切な中干しの徹底。
- 土壌診断に基づく土づくりの実施・基肥の適正な施用。

岐阜（前回変動:令和2年）

1 スムージングスラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は485kg（対前年差-1kg）となった。これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が減少傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、売れる米づくりと高品質安定生産の面から、「ハツシモ」、「コシヒカリ」は一定の作付が維持される一方、収量水準の高い「ひとめぼれ」及び「あきたこまち」が減少傾向にあり、令和3年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)					
		H28	29	30	R1	2
ハツシモ	454	35.7	36.5	42.4	37.4	37.5
コシヒカリ	499	31.8	31.5	30.3	32.2	32.9
ひとめぼれ	501	8.6	7.5	6.2	6.5	6.6
あきたこまち	502	6.8	6.3	4.9	4.6	4.5
						-0.9/年

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)					
		H28	29	30	R1	2
西南濃	464	53.9	53.6	54.6	54.7	54.8
中濃	488	19.2	19.3	19.1	18.7	18.7
東濃	511	14.6	14.6	14.2	14.3	14.2
飛騨	520	12.3	12.5	12.1	12.3	12.3

資料：水稻作況調査結果等
注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

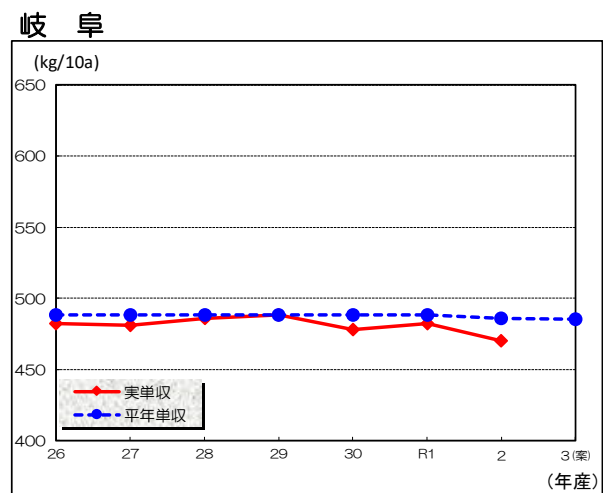
(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

岐阜県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、1㎡当たり全もみ数が1.1ポイント増加、千もみ当たり収量に増減はなく、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



岐阜	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	482	481	486	488	478	482	470	
7中5平均	482 (-4)							
平年単収	488	488	488	488	488	488	486	485
前年差	0	0	0	0	0	0	-2	-1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

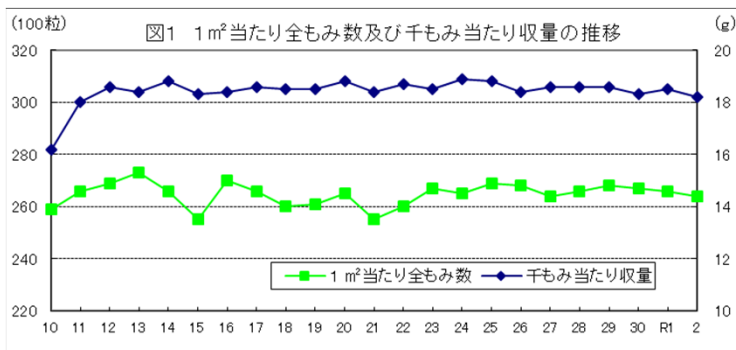
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	16.6	16.1	15.9	15.7	15.7	15.6	△0.1	16.2	97.6	△2.4
1㎡当たり有効穂数(本)	349.6	354	364	356	353	341	△12.0	358	102.5	2.5
1穂当たりもみ数(粒)	75.2	75.1	73.6	75.0	75.4	77.4	2.0	74.4	98.9	△1.1
1㎡当たり全もみ数(百粒)	264	266	268	267	266	264	△2.0	267	101.1	1.1
千もみ当たり収量(g)	18.6	18.6	18.6	18.3	18.5	18.2	△0.3	18.6	100.0	0.0
玄米千粒重(g)	22.7	22.8	22.8	22.5	22.4	22.0	△0.4	22.8	100.4	0.4
10a当たり玄米重(kg)	491	496	498	488	491	480	△11.0	494	100.7	0.7
前40日平均気温(°C)	0.7	0.4	0.8	2.7	1.3	0.1	△1.1	0.8		0.1
後40日平均気温(°C)	0.5	1.0	△0.6	0.1	1.2	1.7	0.4	0.1		△0.4

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらしで7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況終指)数
26	—	×	99
27	—	—	99
28	—	—	100
29	—	—	100
30	—	×	97
R1	—	—	99
R2	—	×	96

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

温暖化傾向に対応するため、以下の指導が行われている。

- ・ 疎植栽培の普及。
- ・ 緩効性肥料の導入。
- ・ 適正な肥培管理。
- ・ 適期収穫。

京 都（前回変動:平成19年）

1 スムージングスラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は510kg（対前年差-1kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年、収量水準の高い品種が減少傾向にあること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

表1 品種別作付面積割合の動向

(1) 品種構成及び作柄地帯別等の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「キヌヒカリ」が減少傾向にあり、令和3年産も同様の傾向になるものと考えられる。（表1）

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
コシヒカリ	496	53.1	52.9	52.9	53.1	54.9
キヌヒカリ	532	20.3	20.0	19.9	19.5	17.2
ヒノヒカリ	512	16.0	15.8	16.5	16.9	17.5

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
南部	516	50.7	50.4	50.3	50.6	50.5
北部	498	49.3	49.6	49.7	49.4	49.5

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

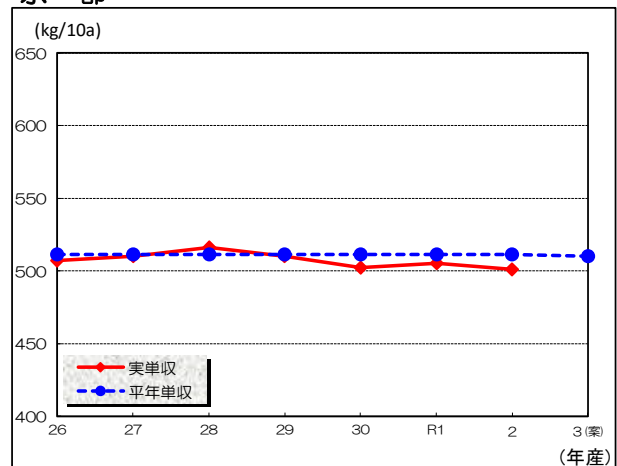
京都府における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数がほぼ同水準である結果、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準

京 都



京 都	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	507	510	516	510	502	505	501	
7中5平均	507 (-4)							
平年単収	511	511	511	511	511	511	511	510
前年差	0	0	0	0	0	0	0	-1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

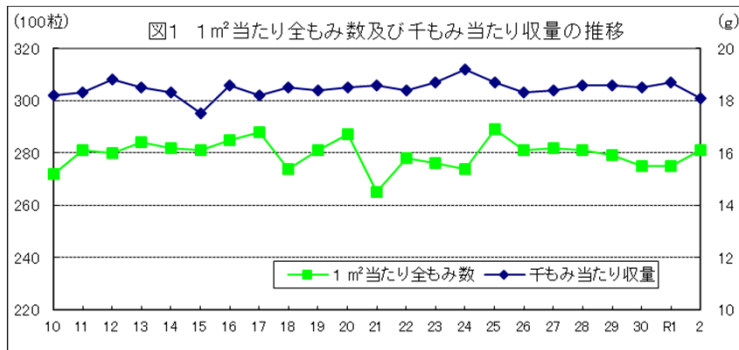
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	17.2	16.4	16.5	16.4	16.4	16.5	0.1	16.5	95.9	△4.1
1㎡当たり有効穂数(本)	340.9	331	353	333	339	334	△5.0	343	100.5	0.5
1穂当たりもみ数(粒)	81.5	84.9	79.0	82.6	81.1	84.1	3.0	81.7	100.2	0.2
1㎡当たり全もみ数(百粒)	278	281	279	275	275	281	6.0	280	100.6	0.6
千もみ当たり収量(g)	18.6	18.6	18.6	18.5	18.7	18.1	△0.6	18.6	100.0	0.0
玄米千粒重(g)	21.8	22.2	22.0	21.8	21.3	21.3	0.0	21.9	100.5	0.5
10a当たり玄米重(kg)	517	524	518	509	513	509	△4.0	519	100.3	0.3
前40日平均気温(°C)	0.8	0.5	1.3	2.3	△0.1	△0.5	△0.5	0.7		△0.1
後40日平均気温(°C)	0.6	0.4	△0.2	0.8	1.4	2.2	0.8	0.2		△0.4

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況最終指数)
26	—	×	99
27	—	×	100
28	—	—	101
29	—	—	100
30	—	—	98
R1	—	—	99
2	—	×	98

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

良質米生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 緩効性肥料の施用
- ・ 適期移植、疎植

兵庫（前回変動:平成28年）

1 スムージングスラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は501kg（対前年差-1kg）となった。
これは、主な生産事情として、近年の収量水準が平年収量を下回って推移していること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別等の動向

品種構成の動向をみると、大きな変化はみられない。（表1）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
コシヒカリ	482	35.9	36.4	36.6	33.8	33.9
キヌヒカリ	496	16.1	14.9	14.4	13.6	13.7
ヒノヒカリ	525	18.9	18.8	18.9	20.0	20.7
山田錦	468	15.3	15.2	14.9	16.2	14.7
きぬむすめ	515	5.3	5.2	5.7	6.1	6.6

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
高収量地域	502	72.3	72.3	72.3	72.3	72.5
低収量地域	476	27.7	27.7	27.7	27.7	27.5

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

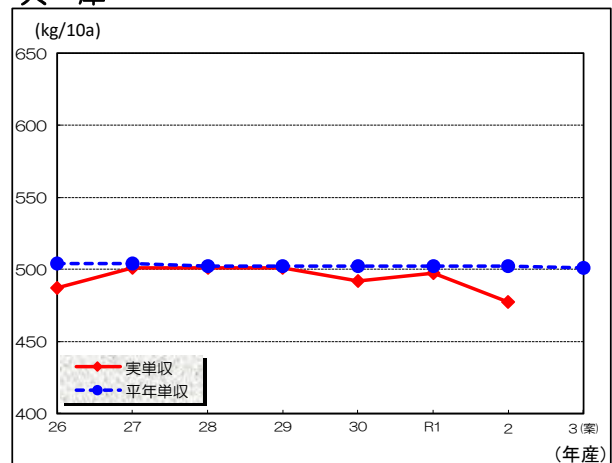
兵庫県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数がほぼ同水準である結果、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表3、表4、図2）

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準

兵庫



兵庫	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	487	501	501	501	492	497	477	
7中5平均	496 (-6)							
平年単収	504	504	502	502	502	502	502	501
前年差	0	0	-2	0	0	0	0	-1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

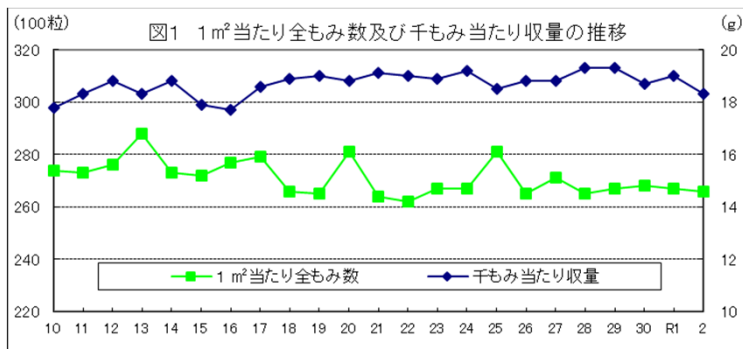
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1㎡当たり株数(株)	16.8	15.8	16.0	15.8	15.9	15.4	△0.5	16.1	95.8	△4.2
1㎡当たり有効穂数(本)	333	329	344	337	335	317	△18.0	338	101.4	1.4
1穂当たりもみ数(粒)	80.3	80.5	77.6	79.5	79.7	83.9	4.2	79.6	99.1	△0.9
1㎡当たり全もみ数(百粒)	266	265	267	268	267	266	△1.0	267	100.3	0.3
千もみ当たり収量(g)	19.0	19.3	19.3	18.7	19.0	18.3	△0.7	19.0	100.0	0.0
玄米千粒重(g)	21.9	21.8	22.4	22.1	21.8	20.9	△0.9	22.0	100.5	0.5
10a当たり玄米重(kg)	506	511	515	500	506	488	△18.0	508	100.4	0.4
前40日平均気温(°C)	0.4	0.4	1.2	1.9	0.1	△0.6	△0.7	0.6		0.2
後40日平均気温(°C)	0.5	0.4	△0.3	0.2	0.8	1.7	1.0	0.0		△0.5

資料: 作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注: 1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注: 2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1㎡当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料: 『作物統計』

表4 最近の作柄(平成26年産以降)

年次	全もみ数	登熟	(作最況最終指数)
26	×	—	97
27	—	—	99
28	×	○	100
29	—	○	100
30	—	×	98
R1	—	—	99
2	—	×	95

注: ◎: 良(多い)、○: やや良(やや多い)、
—: 平年並み、×: やや不良(やや少ない)、
※: 不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

良質米生産に向け、環境創造型農業を基本に品種別に以下の指導が行われている。

- ・ 適期移植
- ・ 適期・適量施肥

鹿児島（前回変動:令和2年）

1 スムージングスプラインによる算定結果及び主な生産事情

令和3年産水稻の10a当たり平年収量は485kg（対前年差+1kg）となった。
これは、主な生産事情として、収量水準の高い品種が増加傾向であること等によるものと考えられる。

2 近年の生産事情、作柄等

(1) 品種構成及び作柄地帯別の動向

品種構成の動向をみると、収量水準の高い「なつほのか」が増加傾向にあり、「コシヒカリ」との価格差も小さいことから今後も移行が進むことが予想され、令和3年産も同様の傾向になるものと考えられる。

（表1）

直近の作柄地帯別作付面積割合をみると、大きな変化はみられない。（表2）

(2) 近年の作柄（気象効果を含む情報）

鹿児島県における近年の10a当たり収量については、平年収量を下回って推移している。（図1）

収量構成要素については、平成17年から27年の平均値と平成22年から令和2年の平均値を比較すると、千もみ当たり収量に増減はなく、1㎡当たり全もみ数が1.7ポイント減少している結果、10a当たり玄米重は2.5ポイント減少している。

※「なつほのか」が栽培される早期栽培においては、1㎡当たり全もみ数が1.2ポイント減少しているものの、千もみ当たり収量がほぼ同水準である結果、10a当たり玄米重はほぼ同水準となっている。

（次ページ表3、表4、図2）

表1 品種別作付面積割合の動向

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
ヒノヒカリ	481	64.2	64.5	62.5	61.4	64.7
コシヒカリ	440	16.2	16.0	15.4	14.4	14.3
あきほなみ	523	6.9	7.3	7.4	7.6	7.6
なつほのか	514				2.4	2.4
					+2.4	

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。

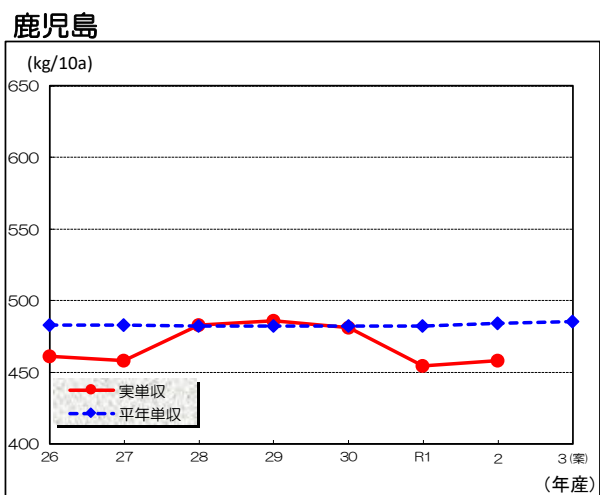
表2 作柄表示地帯別作付面積割合の動向

地帯（地域）名	(参考) 10a当たり 収量水準 (kg)	年次別作付面積割合 (%)				
		H28	29	30	R1	2
高収量地域	495	53.1	53.4	52.4	54.3	54.8
中収量地域	461	42.5	42.5	43.4	41.6	41.2
低収量地域	414	4.4	4.1	4.2	4.1	4.0

資料：水稻作況調査結果等

注：1 10a当たり収量水準は原則として、最近7か年のうち最高及び最低を除いた5か年平均である。
2 作付面積割合は関係機関等の情報から推計した。
3 高収量地域：出水薩摩地帯・伊佐始良地帯、中収量地域：薩摩半島地帯・大隅半島地帯、低収量地域：熊本大島地帯

図1 近年の10a当たり収量と平年収量の水準



鹿児島	26	27	28	29	30	R1	2	3(案)
実単収	461	458	483	486	481	454	458	
7中5平均	468 (-16)							
平年単収	483	483	482	482	482	482	484	485
前年差	0	0	-1	0	0	0	2	1

資料：作物統計（7中5平均の（ ）内は平年対差）

表3 収量構成要素及びアメダスデータ

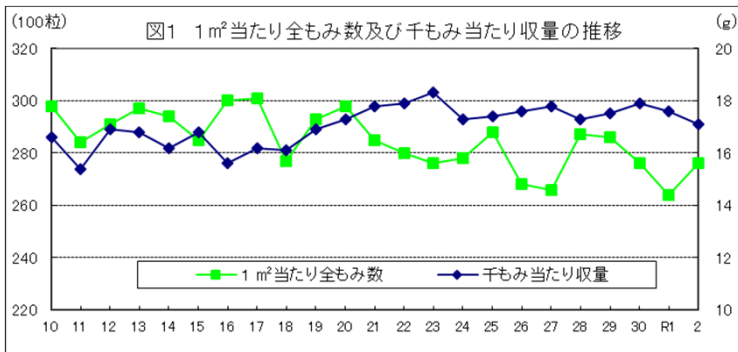
	17~27年 平均値 ①	平成28年	29	30	令和元年	2	対前年差	22~2年 平均値 ②	③= ②/①	ポイント 差
1 m ² 当たり株数 (株)	18.0	17.4	17.5	17.6	17.4	17.4	0.0	17.6	97.8	△ 2.2
1 m ² 当たり有効穂数 (本)	391.1	382	395	380	355	352	△ 3.0	379	97.0	△ 3.0
1 穂当たりもみ数 (粒)	72.0	75.1	72.4	72.6	74.4	78.4	4.0	73.4	101.9	1.9
1 m ² 当たり全もみ数 (百粒)	282	287	286	276	264	276	12.0	278	98.3	△ 1.7
	(早期)	289	281	307	291	290	△ 10.0	285	98.8	△ 1.2
千もみ当たり収量 (g)	17.6	17.3	17.5	17.9	17.6	17.1	△ 0.5	17.6	100.0	0.0
	(早期)	16.1	15.9	16.7	16.2	15.7	16.0	0.3	16.2	100.6
玄米千粒重 (g)	21.4	21.0	21.2	21.4	21.1	21.1	0.0	21.4	100.0	0.0
	(kg)	500	496	500	493	465	471	6.0	487	97.5
10 a 当たり玄米重 (kg)	461	447	513	471	455	449	△ 6.0	459	99.6	△ 0.4
	(早期)	461	447	513	471	455	449	△ 6.0	459	99.6
前40日平均気温 (°C)	0.2	0.8	0.7	0.7	0.3	0.3	0.1	0.3		0.1
後40日平均気温 (°C)	0.3	1.0	0.4	0.3	1.1	△ 0.2	△ 1.3	0.2		△ 0.1

資料：作物統計、アメダスデータ(気象庁)

注：1 アメダスデータ(平均気温)は、出穂最盛期前後40日間の1日当たりの平均(対平年差)。

注：2 17~27年平均値及び22~2年平均値は、5中3移動平均7中5値(5中3平均を1年ずらして7つ作成し、その7中5平均を算出した値)である。

図2 1 m² 当たり全もみ数及び千もみ当たり収量の推移



資料：『作物統計』

表4 最近の作柄 (平成26年産以降)

年次	全もみ数		登熟		(作最況終指)数
	早期	普通	早期	普通	
26	—	※	○	○	95
27	※	×	※	○	95
28	—	○	×	×	100
29	◎	—	○	×	100
30	○	×	—	—	100
R1	—	※	×	—	94
2	×	—	—	×	94

注：◎：良(多い)、○：やや良(やや多い)、
—：平年並み、×：やや不良(やや少ない)、
※：不良(少ない)

(参考) 栽培技術等の動向

良品質米の生産に向け、以下の指導が行われている。

- ・ 健全な土づくり。
- ・ 適期植付・防除・収穫。
- ・ 適正な栽植密度・施肥・水管理。